

公益財団法人 渥美国際交流財団

2024年度
奨学生秋季研究報告会

当日の写真



2025年9月27日於：KX-LAB

渥美直紀理事長による開会挨拶で研究報告会が始まりました

総合司会は原田健事務局長。



開会挨拶



18世紀オスマン朝イスタンブルにおける船着場の社会構造分析-同業組合の分析を通じて-

岩田 和馬

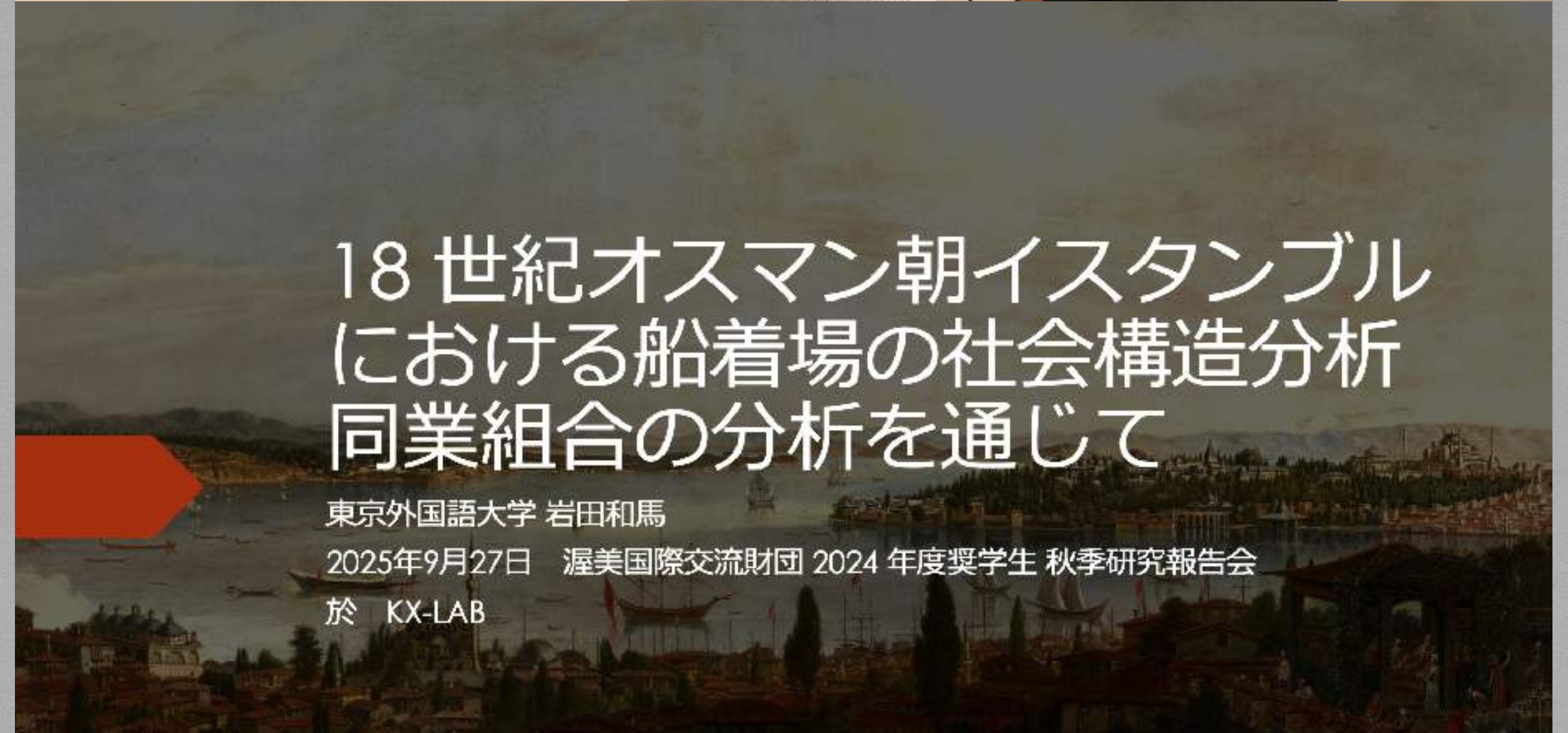
日本/東京外国語大学/世界言語社会



コメントを寄せてくださった
指導教官の高松 洋一 先生



紹介役を務めた
ラクスミワタナ モトキ さん



マレーシアのボルネオ島の地方における英語教育の考察

マスニン ムハammad ファリス シノン ビン
マレーシア/早稲田大学/社会言語学



コメントを寄せてくださった
指導教官の 飯野 公一郎 先生



紹介役を務めた
黒滝 香奈 さん



Braj Kachru's Circles of World Englishes

マレーシア AND 英語

- 元イギリスの植民地⇒第二言語としての英語(English as a Second Language, ESL)
- 大学の授業や仕事、社会のいろいろな場面で広く使われている

However...

- 日常でよく使われているのは都市部、特にマレー半島
- 地方では外国語に近い存在

- ⇒英語=チャンス
- ⇒英語=ハードル



明末清初における『遺民』の諸相

顧 嘉晨

中国/東京大学/アジア文化研究



コメントを寄せてくださった
指導教官の小島 毅 先生



紹介役を務めた
岡本 聡美 さん



渥美国際交流財団2024年度渥美奨学生秋季研究報告会



明末清初における「遺民」の諸相

顧 嘉晨

東京大学大学院・人文社会系研究科



『ハーフ・ダブル・ミックス』と『日本人』の境界

佐藤 祐菜

日本/慶應義塾大学/社会学



コメントを寄せてくださった
指導教官の 塩原 良和先生



紹介役を務めた
黒滝 香奈 さん



博士論文の考察と結論

「ハーフ」というカ
テゴリー化の動機

• 「日本人らしさ」からの部分的な違いを理解するため、「ハーフ」というカテゴリー化が行われている

「ハーフ」というカ
テゴリー化の背景

• 多様性が可視化される中で、「日本人」をめぐる境界が揺るがされている
• ⇒ 「真正な日本人」か否かという見分けの実践

「ハーフ」が「日本
人」の境界に与え
る影響

• 「日本人」の定義の拡張⇔「日本人らしさ」の境界を維持



休憩

転んだあとの歩き方：転向文学と植民地台湾

邱 政 芃

台湾/東京大学/言語情報科学



コメントを寄せてくださった
指導教官の 村上 克尚 先生



紹介役を務めた
野田 智仁 さん



転んだあとの歩き方
— 転向文学と植民地台湾 —

東京大学総合文化研究科 言語情報科学専攻
邱政芃

渥美財団2025秋季研究発表会 2025年9月27日

「帝国日本の「教」、亡国韓国の「義気」—有賀長雄・兪吉濬における「文明」論の交錯

崔 民赫

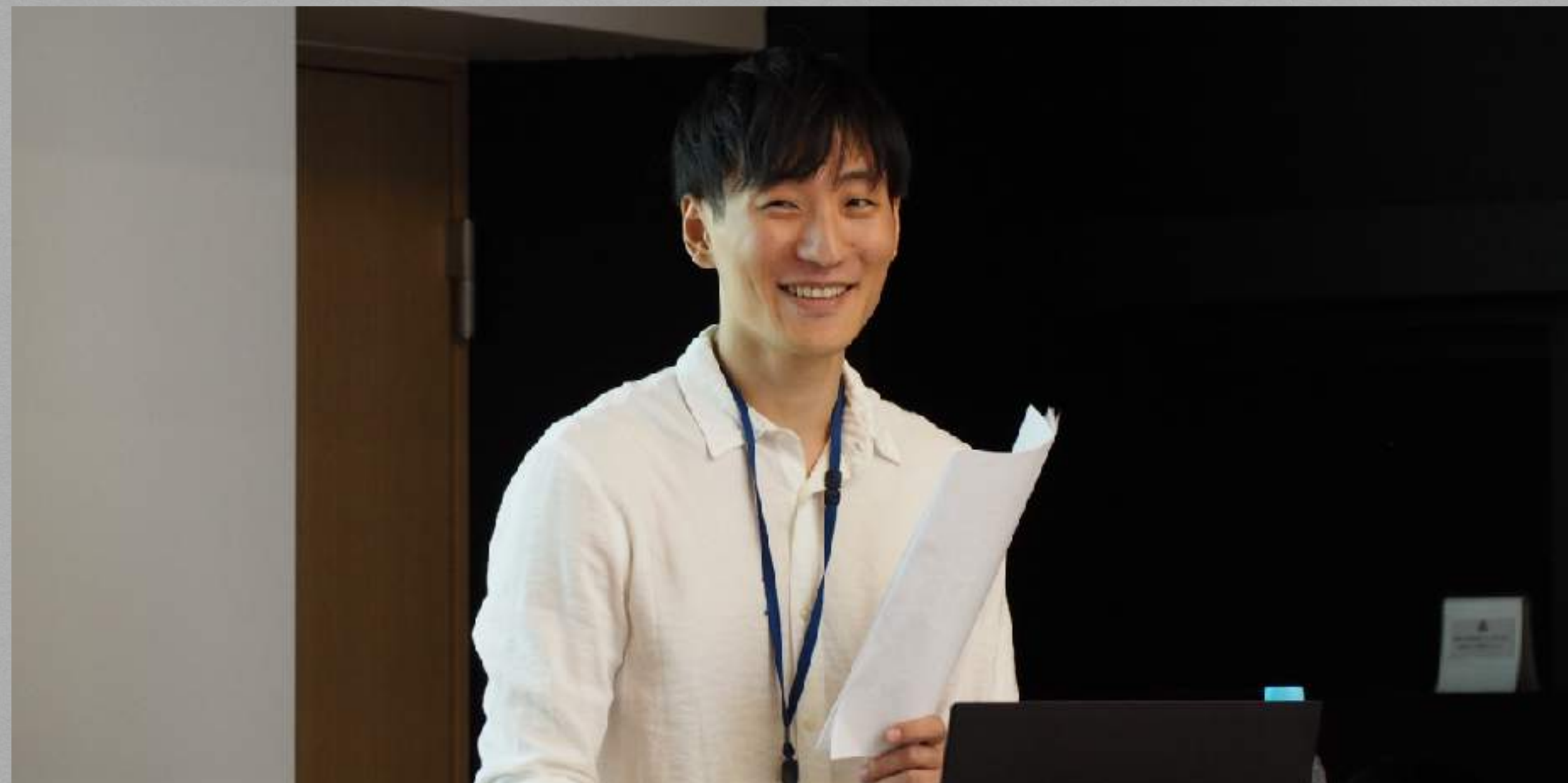
韓国/東京大学/総合法政研究



コメントを寄せてくださった
指導教官の 苅部 直 先生



紹介役を務めた
姜 錫正 さん



「文明には外に見はるゝ事物と内に存する精神と二様の区別あり」『文明論之概略』

- ・福澤諭吉の説明に従って、目に見えない「無形」のものと外に現れる「有形」のものを分けて考えてみましょう。

有形

無形

①衣服、飲食、器械、住居

②政令、法律



「文明の精神」=
「人民の気風」

高次脳機能障害者支援の“制度の狭間”— MSW × 社会的処方で解決する実装研究 —

大元 慶子

日本/関東学院大学/社会（障害）学



コメントを寄せてくださった
指導教官の 湯浅 陽一 先生



紹介役を務めた
イドゥルス さん

ka OMOTO

20
参加者 聊天 反応 共有 AI Companion 会议信息 应用 更多

研究の総括

- 高次脳機能障害者支援においてMSWは **社会関係資本の構築者** として機能
- 社会的処方箋** の概念が医療-福祉連携の新たな可能性を提示
- 多職種連携と地域資源の戦略的活用が支援の質を向上
- 当事者・家族を中心とした **包括的支援体制** の重要性

今後の展望

- MSWによる **リンクワーカー** 機能の制度化推進
- 予防的介入** プログラムの開発と検証
- 地域包括ケアシステムへの **統合的アプローチ** の確立
- 当事者主体の支援評価指標の開発

学問的・実践的意義

- MSWの役割の **理論的再構築** による実践モデルの提示
- 社会関係資本理論と医療ソーシャルワークの **学際的統合**
- 社会的処方箋の日本における **実装可能性** の検証

残された課題

- 制度間連携 の具体的方策の精緻化
- 社会的処方箋の **費用対効果** の検証
- より広範な地域・施設での実践モデル検証

戦後日本語文学における朝鮮表象研究—トランスナショナルな共同性の模索—

崔 高恩

韓国/東京大学/言語情報科学



コメントを寄せてくださった
指導教官の 村上 克尚 先生



紹介役を務めた
イドジーエヴァ ジアーナ さん



研究の発見 三つの重要な発見

1 複雑な主体の存在

- 単純な加害者・被害者では説明できない
- 引揚げ者、在日、国際結婚...
- それぞれが複数の歴史を背負っている

2 重層的な時間意識

- 植民地時代は「終わった」のではない
- 冷戦も形を変えて継続している
- 過去・現在・未来が絡み合っている

3 文学の固有の力

- 公式の歴史には載らない個人の声
- 矛盾や葛藤をそのまま描ける
- 複雑さを単純化しない

荻部 直先生（東京大学教授・2024年度奨学生崔 民赫さん指導教官）



劉 傑先生（渥美国際交流財団理事）



施 建明先生（渥美国際交流財団理事）

今西淳子常務理事、
渥美直紀理事長の閉会挨拶で発表会は締めくくられ、
会場には学問を超えた対話と共感の空気が広がった。

閉会挨拶



集合写真

みなさまのこれからのご活躍も
変わらず応援しております！

